

「私の負けです、神さま」

エレミヤ記

第20章 7節～9節

説教 本庄 侑子 伝道師

今朝お読みしているのは『涙の預言者』と呼ばれるエレミヤの言葉です。神に与えられた使命の過酷さ、苦しみ、また孤独に身を擦らせながら、なおその人生を生き、使命を全うした人の言葉です。

『自分に打ち克つ。』という言葉をよく聞きます。しかし、聖書に出てくる人物たちは自分で自分に克つということをしません。エレミヤもその一人です。「あなたの勝ちです。」「私の負けです。」そう言っています。

預言者になることは、エレミヤ自身が願ったことではありませんでした。若き日に主の言葉が臨んだのです。その時、エレミヤは断りました。神の自分への計画を喜ばなかった。しかし、神に説得されるようにして預言者となりました。

エレミヤは神の言葉を語り始めました。その大半は祝福を告げる言葉ではなく、災いを告げる言葉でした。しかし、裁きの預言は一向に実現しません。語れば語るほど、人々から嘲られ、孤独になりました。神は本当に真実なのか。神を信じている私が愚かなのではないか。この時、エレミヤは神に騙されたと思えなくなっていました。

この経験はエレミヤだけではないと思います。預言者とは未来を予知する人のことではありません。神の言葉を預かって語り伝える人のことです。今こうして神の言葉を語り伝える教会が預言者であり、教会で神の言葉を聞き、日日聖書に親しみ生きているキリスト者も皆、預言者です。私たちの誰一人として、自ら選んでキリスト者になった人はいません。たとえ自分から洗礼を受けたいと願い出たとしても、その背後には先行する神の招きがありました。私たちもみな、神に説得されるようにして信仰に導かれ、キリスト者となったのです。

エレミヤが預言者となったことを後悔したように、こんな思いをするくらいだったら洗礼を受けなければよかったと思ったことはないでしょうか。私にはありました。このままでは友人を失い、家族が寂しがり、職場の付き合いができなくなると、教会から逃げようと思いました。しかし、これまで聞いてきた神の言葉が心の中、骨の中にあって燃え上がるのです。キリストへの信仰に疲れるのではなく、その信仰を抑えつけておく

ことに疲れ果ててしまいました。それほどにこの私を、この世に生きる人々を愛し抜いておられる神に根負けして生きてきたと言えます。エレミヤの告白は代々のキリスト者が叫んできた叫びであり、時代を超えて差し伸べられてくる信仰の友からの助けの手、励ましの言葉です。

一方、信仰が与えられているいないに関わらず、エレミヤの告白は、私たち皆の叫びでもあります。生まれる時代や国、家族や性格など、神に与えられたとしか言いようのないものを背負って生まれ、その命を生きていかななくてはならないからです。人生の途上でもそうでしょう。予測不可能なことが次々と起こって来ます。

この時、エレミヤは神に与えられた人生に苦しみ、死を欲する程の嘆きの中にありました。しかしそれでもなお律法には留まっていた。神がどの様な方であるかを散々聞いてきたからです。生まれた日を本気で呪うほどの苦しみの中にあっても、嘆きの先で、神が私を愛しているという着地点に落ちていくのです。苦しみも叫びもこの神の愛の外へ出ていくことはできない。すべてのことはこの事実の中で起こること。そうして神に降参し、神がお与えになる道を受け入れて生きていきました。

エレミヤが語らされた言葉が成就したのは、ずっと後のことでした。死後において成就したこともあった。私たちの人生は、私たち自身の命の長さだけでははかりきれない、もっと大きな神の計画の中に置かれているのです。これまでを振り返って神の摂理を実感し、感謝することもあるでしょう。しかしまた同時に、未解決のまま、不条理極まりないままで命の終わりを迎えることもあるのです。しかしそれでもなお、神の愛の事実の故に、全てを神に委ねて、神が与えてくださった人生に平安と満足を見出して毎日を精一杯生きていく。それがキリスト者に与えられる幸い、特権です。

私たちは今週も、神に打ち負かされて、神に与えられる人生を受け取って生きていきます。神の尊い目的を身に帯びながら、たった一つの人生、二度と繰り返されることのない一週間を、神の懷に抱かれるようにして、精一杯生きていくのです。

(記 説教要約奉仕者)